

県研究主題

これからの生活を見通し、よりよい生活を創造するとともに、社会の変化に主体的に対応する能力や実践的な態度を育てる学習指導と評価の工夫・改善

提案1（技術分野）

提案者 大橋 貴弘（横須賀地区）

<研究主題>

生活や生き方を見通し、自立して生きていく生徒の育成

— 目標の明確化と指導と評価の一体化を図る授業実践 —

1 提案内容

生徒の実態としては、授業中に発言する生徒が多く、学ぼうという意欲はあるが、本教科に対し、得意な生徒と不得意な生徒が二分化されている。また、二つ以上の内容を関連づけることが困難である。そこで現代の生活を工夫し創造し、より良くするためにはどうすれば良いのか考えさせる授業を実践するようにしている。

授業の中で普段の生活で起こりうる問題を取り上げ、解決策を考えることができれば生活との関連を強めることができると考えた。また、各教科等と技術分野との指導内容を関連づけることで、社会的側面や経済的側面等からも技術を考え、判断できるのではないかと考えた。以上より、「内容 Bエネルギー変換に関する技術」の中で次のような授業を行った。

(1) 指導の工夫

① 題材における指導順序の工夫

製作の前に、発電や送電、光エネルギーや熱エネルギーへの変換等の知識を身に付けさせ、製作はまとめて時間を確保し、知識は知識、技能は技能で分けて指導した。

また、製作の中でそれまで身につけた知識がどのように利用されているのか考えさせたり、製作後に技術を今後どのように利用すれば良いのかを考えさせたりするようにした。

② 身近な生活と関連させた題材の設定

画像や動画、実物などで、実際の家庭における電気の使用状況を見せながら電気によってどのような事故が起こるのか、どうすれば解決できるのか、家庭の契約電流はどうなっているのか等を調べさせた。

③ 各教科との関連を意識した取り組み

各教科で学習した視点を、知識や技能だけでなく、能力や態度面でも技術分野に活かすことを考えた。

(2) 課題

① 今回は、知識と技能の関連について十分な結果があげられなかった。しかし、授業と日常をつなげることは有効だと感じたので、製作に使用している部品と家庭にある部品とを結びつけるなど、知識と技能をつなげる指導を継続して実践していく。

② 題材の計画だけでなく、三年間を見通し、他の内容とも関連させた計画をしっかりと立て実践していく。

③ エネルギー変換に関する技術の内容は他の内容と関連させて行うこともあるため、三年間で何をどこで扱うか計画を立てることでよりよい指導につながると感じた。

2 協議内容

(1) 指導計画を工夫するための視点

- ① 技術が影響を及ぼす範囲が、一年から三年へと学年が上がるにつれて生活、地域、社会と広がっていくこと。
- ② 子ども達の発達の段階に応じた難易度にする事。
- ③ 新指導要領のA、B、C、Dの内容の順序は、学年設定のさじ加減がしやすいと思われる順序と考えられるので、そのことを考慮し計画を立てること。
- ④ 学習が一過性のものにならないよう、目に見えて成果がわかるものを製作、制作、育成の対象とし、生徒の作業の選択肢を与えること。
- ⑤ 何を製作するにも、イメージを引き出させることが大切であること。
- ⑥ 複合教材や融合教材を考え、他教科とリンクさせて計画すること。

(2) 学んだ知識・技能を生活に活用するための指導の工夫

- ① 題材を身近なものにする。
- ② 継続的な振り返りをさせる。ビフォーアフターのレポートや家庭への発信などを行う。
- ③ A、B、C、Dの内容を連携しながら実践していく。
- ④ 将来、技術で学んだことを活かして、社会の中で自分に必要な技術を評価・選択できる力を養う。
- ⑤ 科学技術の発展にともなって、これからの子ども達には更なる思考力や創造力が必要である。

3 まとめ

- (1) 子ども達の身近な技術を扱ったのは良い。課題解決については、いかに生活に返していくかがこれからの課題となる。今回も扱ってはいるが、そこから課題を見つける工夫が必要。また、カリキュラム・マネジメントの視点から、3年間を見通した組み立てが必要である。実際には小学校の内容を復習したり内容Aを多く実践していたりしている部分もあるので、各教科等との連携を考えなければならない。
- (2) 身近な題材、地域教材を使っていくことが大事である。学んだことを活かすため、技術と家庭科の連携となる例が多くある。社会、理科等とも協力できる体制が大事になってくる。主体的な学びとするための題材設定が大事である。知識に偏ることなく、工夫し創造する視点を大事にしたい。また、深い学びにするには製作して終わりではない。そこから課題を見いだし解決していく態度を養っていきたい。

提案2 (家庭分野)

提案者 白勢 まどか (湘南三浦地区)

<研究主題>

自分の食生活を工夫し創造できるようにする教材の研究

1 提案内容

「B 食生活と自立」は、生徒の興味関心が高く、調理実習など積極的に行う生徒が多い反面、基礎的な栄養素などへの興味は低い傾向がみられ、定着の割合も低くとどまっているのが現状である。そこで、自分で食生活の課題を認識し、解決方法を考え、実践させるにはどうしたらよいか、という視点で研究を進めることにした。

まず、指導計画の工夫として、これまでは、栄養素の働き等を学習した後、すぐに食品群別摂取量のめやすや食事摂取基準の学習を行っていたが、それを〔①栄養素の働きや食品群の定着を図る授業を工夫する⇒②調理実習を通して食品の概量を知る⇒③食品群別摂取量のめやすを把握させる⇒④1日分の栄養バランスを考えたメニューをグループで考えさせる〕という流れに変えた。栄養バランスの概量を把握させる授業を調理実習後に行うことで、生徒の概量に対する意識の高まりがあったかどうか、日常の食生活を工夫し創造する力につながったかどうかを考察していきたい。

(1) 研究の視点と成果

① 効果的な指導計画の工夫について

ア 調理実習の後に食品群別摂取量のめやすの学習を行う

調理実習を経て、食事摂取基準や食品群別摂取量のめやすの学習を行った結果、食品の概量が定着していた。

イ 3学年にわたって食生活と自立の学習を行う

1回の授業で意識を高めることができてもそれを継続させることは難しいので、断続的ではあるが、何度も繰り返すことが大事だと実感した。

② 実践的・体験的な学習活動について

ア 教材の工夫 ～ワークシート～

ワークシートの最初に目標を書くように設定した。その目標は、できるだけ、生徒が学習している内容が、これからの生活にどうつなげていけるか考えやすいように設定した。また、ワークシートの中に保護者からの欄を設けたことで、家庭での「食育」に対する意識を高める一助になった。

イ 教材の工夫 ～実物や写真を使用する～

1日分の献立を立てる授業では朝食・夕食の写真つきメニューを見て、昼食＝お弁当を考える形にすることで、生徒は興味を持って取り組み、いろどりや食品群、割合など様々な面から考える授業となり、グループでの実践的・体験的な学習活動が展開できた。

③ 問題解決的な学習・言語活動の充実について

献立の立て方の学習について、「自分たちで献立の立て方を考える」という授業展開を行ったことで、生徒はより自主的に授業に参加し、一人ひとりがもっている知識を学び合いにより深めていくという場面が多くみることができた。

(2) 課題と改善点

① 広い視点でバランスを捉える

栄養、調理時間、値段、食品添加物、加工食品、好き嫌いなど、広い視点で「バランス」をとらえていくことは、学んだことを自らの生活に生かし、実践していくことにつながる重要なポイントであると感じた。

② 自らの生活に生かす力を育てる

学びがどのように生活に生かされていくのか。そのための手立てをどのように仕掛けたらよいのかを、今後も模索していきたい。

2 協議内容

全体協議の柱「生活を工夫し創造する力を育成する指導の工夫」

(1) 指導計画を工夫するための視点

- ① 地域の状況（外国籍の生徒が多い、一人親が多いなど）を把握する中で、3年間の授業計画を立てなければならない。
 - ② 家庭の協力を得ながら、家庭と連携して実施できる内容を取り入れ、家庭に返せるよう工夫する。
 - ③ グループ活動は、消極的な生徒の場合、3人グループだと全員が主体的になれる。
 - ④ 学校行事に家庭科の授業内容を関連付けることを意図的に実施している。（キャンプ前に調理実習など）
 - ⑤ 日本の文化、海外の文化を取り入れた中で、授業をつくっていく必要がある。
- (2) 学んだ知識・技能を生活に活用するための指導の工夫
- ① 授業を始める前に、目標を示すことが大事。前時を振り返る発問や発言から、生徒の達成感がわかり、自己評価にもつながる。
 - ② 題材は、生徒の身近かなものをいかすよう工夫する。
 - ③ 10年後、20年後の生徒の生活につながるような授業づくりをする。
 - ④ 教員が指導の工夫をすることは、生徒の実態にあわせて生徒と一緒に授業をつくることにつながり、そのためには、ワークシートの工夫をしたり、何を学ばせたいのか考えたりする時間が大切である。
 - ⑤ 「身に付けさせたい技能」を明確にして、その学校に応じた指導を行う。

3 まとめ

- (1) 新学習指導要領が、平成33年度から完全実施となるが、現行の指導要領をきちんと取り組むことが、何よりも大事である。提案の「自分の食生活を工夫し創造できるようにする教材の研究」は、新学習指導要領にすると、「これからの健康的な生活を展望して、現在の自分の食生活を献立作成の視点から見つめる」につながる。
- (2) 新学習指導要領では、内容A「家族・家庭生活」、内容B「衣食住の生活」、内容C「消費生活・環境」の3つで構成されている。生活の営みの係る見方・考え方を踏まえ、生涯にわたって、共に生きる社会の中で、それぞれが自立した生活を工夫し創造していくために必要な力を育んでいく。
- (3) 平成32年度の関ブロ神奈川大会にもつながる貴重な提案に感謝する。